

東京駒込に遺る鉄筋コンクリート造共同住宅の建設経緯と建築の概要

正会員 ○安野 彰* 同 内田青蔵* 同 井上祐一* 同 柳葉悦子** 同 窪田美穂子***

キーワード：鉄筋コンクリート造、アパートメントハウス、昭和初期、東京

1 はじめに この共同住宅は、昭和13年に竣工した地上3階建て鉄筋コンクリート造の建物で東京の駒込に立地する。こうした土地の高度利用や耐震性などを意図した同時期の住宅は、森本厚吉が主導した文化アパートメントや同潤会によるアパートメントハウスなどが知られるものの、実際に建設された件数は希少とされる。また、上記の著名な事例以外には、戦前期におけるこの種の共同住宅の実例はあまり知られていない。その意味で、この遺構は極めて貴重といえる。本稿は、この共同住宅の建設経緯と建築の概要について報告するものである¹。

2 建設宅地の開発 この共同住宅周辺の駒込一帯の土地は、明治11年、岩崎弥太郎によって購入され、このうち旧柳沢邸（現六義園）は岩崎家の駒込別邸として利用された²。共同住宅が位置する現駒込四丁目付近の街区部分が岩崎家に所有されていたかは不明だが、当該宅地は三菱倶楽部や岩崎家墓地に隣接し、地図を見る限り大正末までは空地のままであったことから、その可能性は高い³。その後、近辺の岩崎家所有地は、六義園部分を除いて漸次売却されていったとされるが、大正12年に行われた大和郷開発以外は、当該街区を含めて詳細は不明である。ただし、この街区内の居住者の住所を時代を遡って調べると、大正末まで駒込以外に居住していることから、街区内に住宅が建ち始めたのは、昭和以降と考えられる⁴。すなわち、共同住宅が立地する宅地の開発は大正末から昭和初期と推測できる。

物件が立地する街区は、長辺が200m以上、短辺が50mを超える矩形で、背割線によって20に分筆された戸建て住宅地になっている。1筆は約200坪前後（当該敷地は230坪）で、この規模は、当時の住宅地でも比較的に大きめの事例であったといえる。事実、地図の記載から推測される世帯主の経歴を見る限り、会社重役、大学教授など、社会的地位の高い人物が居住していた⁵。

3 共同住宅建設の経緯 施主である信原済夫は、遺族に依ると、明治44年に東京帝大機械科を卒業後に三菱金属に入社、同社のベルリン支店に十数年勤務し、帰国後は同社の総務部長に昇格したという⁶。ただ、『大衆人事録』では「昭和13年より三井物産機会部参事」、昭和16年発行の『人事興信録』では「三井物産社員」と

あり、正確なところは不明である⁷。いずれにしても、信原は大正から昭和初期にかけての多くをドイツで過ごしたようである。また、遺族によれば、信原はこの共同住宅を欧米人向けとして企画し、実際にも、そうした居住者を迎えたとされる。長期に渡ったドイツでの生活体験が信原の計画の方向性に影響を及ぼしたと推測できる。

建築の設計は江畑幸太郎に依頼された⁸。江畑は明治43年に築地工手学校を卒業後、陸軍第一師団經理部に所属、大正9年に大阪府営繕課に勤務していた記録がある⁹。昭和12年の『建築学会会員名簿』では「建築技師」と紹介されている。信原と江畑の関係は不明だが、昭和11年からの江畑の住所は、建設地近く小石川区林町とある。建設を計画した頃の信原の住所も同区白山御殿町で、両者の住所間は約600mの距離であった¹⁰。すなわち、地理的な親近から設計の依頼に至った可能性はある。

また、施工は大阪に本社を構える藤木工務店東京支店が請負った。藤木工務店が仕事を得了理由は明らかではないが、これに弥々先行して、大阪マンションと大阪セントラルアパートという著名な同種の物件を施工している実績が考慮されたと思われる¹¹。

竣工時期は、申請では昭和12年12月とあるが、工事書類より、昭和13年にずれ込んだと判断できる¹²。

4 建築の概要 鉄筋コンクリート造の建物は、概ね3層で一部に地階と屋階がある。敷地北側の道路寄りに配置され、南側にはプライベートな広い庭が確保されている。建築面積は約41坪、延床面積は約132.2坪である。

信原の遺族が保管していた図面には、平面形状は奥行



0 1 2 5m 実測に基づく南側立面図 図面製作：柳葉悦子

Report on an Apartment House Constructed in Early Showa Era at Komagome Tokyo

YASUNO Akira, UCHIDA Seizo, INOUE Yuichi, YANAGIHA Etsuko and KUBOTA Mihoko

き 8.2m、間口 16.2mの矩形で、桁行のスパンは全体を4等分した 4.1mと記されている。すなわち、4.1mを基準に、短長辺の比が 1:2 の平面に計画されたことが判る。ただし、4.1mは 13.5 尺に近似するので、当初は尺貫法で設計したものをメートル法で表記した可能性がある。

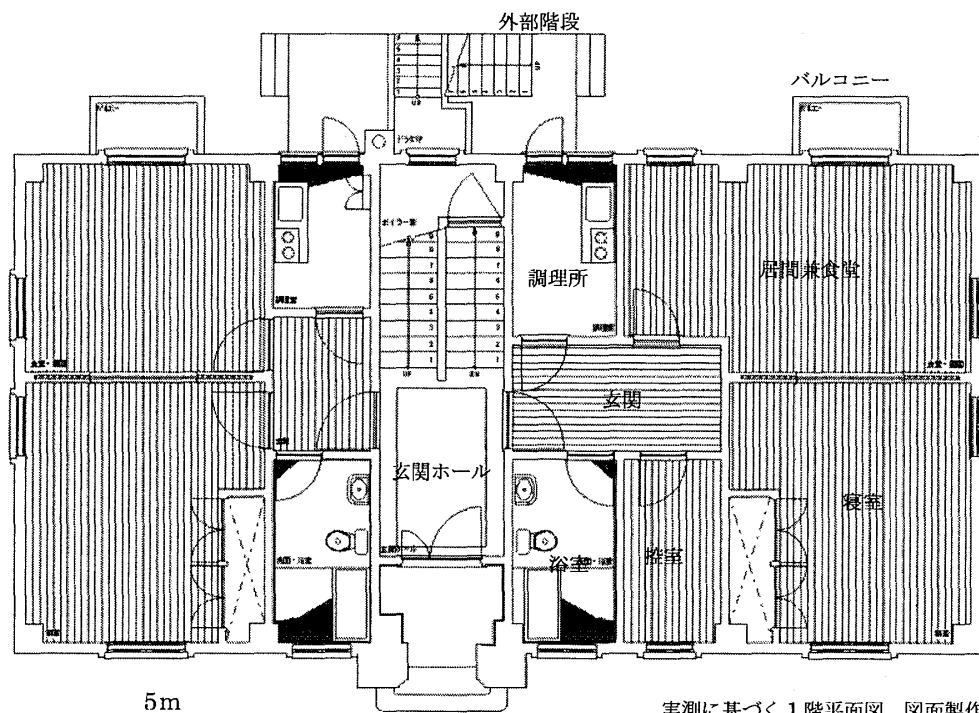
1階では、東側から2つめのスパンのうち、内側の半分強が玄関と階段室に充てられており、東側の住戸は約 1.5 スパンの大きさとなっている。2、3階では1階のポーチ部分と玄関ホールの半分が東側住戸の浴室に充てられ、1階の住戸よりも若干広い。西側の住戸は、1~3階まで2スパンで、共同住宅全体は6戸から構成される。

各戸とも「居間兼食堂」、「寝室」、「調理所」、「浴室」、「控室」があるが、1階の東側の住戸には「控室」が無い。各戸の玄関も、他室と同様に板敷きとなっており、靴脱ぎのための設えになっていない。また、浴室には洋便器が設置され、当時の一般的な日本人の生活とはそぐわないつくりとなっている。加えて、天井高が 3.24mと高い。これらの点は、この共同住宅が欧米人向け住宅として計画されたという、遺族の証言に合致するといえる。

また、両開きの引込戸を用いることで、「居間兼食堂」と「寝室」を一室のように使用できるほか、諸室の開口部が二重の開き戸となっている。加えて、全戸の「調理所」は南面して外部の庭へ直接通じる計画がこの共同住宅の特徴として挙げられよう。なお、2、3階からは、鉄骨造の外部階段を介して庭へと通じている。

5 むすび 以上、昭和戦前期の東京駒込に建設された共同住宅について、宅地開発、建設経緯、建築概要を検討した。ここまでのところ、この共同住宅は、大正末から昭和初期に開発された住宅地の一画に外人向けの物件として計画され、それを反映させたデザインで建築されたと考えられる。しかし、周辺の土地開発や建設経緯については不明な点が少なくなく、建築についても、精緻な分析が必要で、今後の課題である。

- 註
- 1 本稿は、平成 12 年 8 月に行われた調査に基づくものである。調査は、豊島区による近代住宅に関する調査の一環として行われ、調査結果は 2001 年度の報告書に纏められている。本稿の内容は、それに順ずるものである。
 - 2 岩崎家伝記刊行会『岩崎弥太郎伝 下』東大出版会 昭和 42 年 pp.635-639
 - 3 『火災保険特殊地図 35 区』都市整図社 昭和 62 年、大日本帝國陸地測量部『一万分一地形図 東京近傍十一號 早稲田』大正 14 年部分修正を参照。しかし、この付近の土地所有については再調査の必要であろう。
 - 4 『日本紳士録 第 30 版』交詢社 大正 16 年用、『大衆人事録 第 12 版』帝國秘密探偵社 昭和 12 年
 - 5 『大衆人事録 第 12 版』帝國秘密探偵社 昭和 12 年 によれば、区内には、東横電鉄取締(小宮次郎)、三井銀行参事(中橋和一)、三菱合資・日本毛糸・ビクター蓄音機監査(寺澤健二)、東京帝大助教授(山口與平)、日本女子大学教授(小野田忠)、東京女子高等学校教授(黒田チカ)、政府書記官(赤間信義)などが居住していた。
 - 6 施主のご遺族に対する聞き取り調査ならびに江畑幸太郎の略歴調査には、山口廣先生のご協力をいただいた。
 - 7 『大衆人事録』帝國秘密探偵社 第 13~14 版 昭和 15~17 年、『人事興信録』人事興信所 昭和 16 年
 - 8 建築申請書類の記載による。
 - 9 『日本建築学会会員名簿』日本建築学会
 - 10 江畑の住所は『日本建築学会会員名簿』日本建築学会の記載による。信原の住所は、建設工事書類の記載等による。
 - 11 『藤木工務店 70 年史』藤木工務店 平成 4 年
 - 12 警視庁に届けられた書類には、竣工は昭和 12 年 12 月 25 日とあるが、請求書の日付を追うと昭和 13 年以降に追加工事費として建具工事費、門扉工事費、浄化槽工事費など一部の工事は 13 年にずれこんだと考えられる。



実測に基づく1階平面図 図面製作：柳葉悦子

* 文化女子大学
** Yh.建築工房 主宰
*** 箱根町教育委員会補佐員

Bunka Women's University
Yh. Architectural Studio
Assistant of the Board of Education of Hakone Town